



鶴の笛 (II)

さっそく、おみやげをつくって笛の音色の方へ旅立ちますと、西の方から、子供の鶴を三羽もつれた夫婦の鶴に会いました。

「おやまア、随分久しぶりですね。どうしたンですか……。」

お嫁さんの鶴がたずねますと、

「ええひどいめに会いましたよ。

どこへ行ってもいいことはなく、

とうとう、私の子供はふたりとも



鶴の笛（12）

病気で死んでしまいました。どこか、いいところはないかと思って、方々さまよっているところへ、何ともいえないきれいな笛の音がするので、きっと、あの笛の鳴る方にはいいことがあるにちがいないと思って、やって来たのですよ。」と申しました。

「まア、そんなに笛の音が遠くまで聞こえるのでしょうか。あれは、



鶴の笛 (13)

足の悪いうちの主人が吹いているのですよ。」

お嫁さんの鶴の案内で飛んでゆきますと、自分たちのみすてた村だったのでびっくりしました。お嫁さんの鶴は、笛の音色を長いあいだきいていましたので、心のなかがひろびろしていて、どんなに自分たちが困っていても、ほかのものにほどこしをするのは気持の



鶴の笛 (14)

いいものにおもうようになっていました。

さっそく、さっきとってきた魚を夕食に出して、旅づかれのした、おなかのすいている鶴たちに食べさせてやりました。

足の悪い鶴も、お嫁さん鶴も、ほんの少したべたきりで、「遠慮しないでおあがりなさい。たくさん食べて元気を出して行っ



鶴の笛 (15)

て下さい。」

と、しきりにすすめましたので、
鶴の親子は涙ぐんでしまいました。

つづく

